



説教要旨「呪いたくなるような現実」

使徒言行録 16章 11～25節

フィリピの町には、まだユダヤ教の会堂がなかったため、パウロたちは川岸に集まって福音を語りました。そこでリディアという異邦人女性が、心を開いて福音を聞き、家族と共に信仰に入ったのです。幸先の良い出発をしたフィリピ伝道でしたが、そこに思いもかけない災難が襲いかかります。悪霊にとりつかれた女奴隷につきまとわれたパウロは、堪りかねて彼女から悪霊を追い出したのです。それによってこの女奴隷は救われるのですが、彼女によって多大な儲けを得ていた女奴隷の主人らは、腹いせに、パウロとシラスを引き立てて、役人に訴えたのでした。このためパウロとシラスは鞭打たれ、死刑囚として投獄されたのです。驚くべきは、明日にも処刑されるかもしれないこの絶対絶命の危機に、パウロたちは神を賛美し、祈ったというのです。

わたしたちも、苦しいときに神様に助けを求めて祈ることがあります。「神様どうかこの苦しみを取り除いてください」と。そして、その苦しみを乗り越えることが出来たときになら、神様に感謝して、神を賛美することが出来るかも知れません。しかし、パウロとシラスは苦しみの最中、散々痛めつけられて、明日にも処刑されようかという状況下で、賛美の歌を歌い、祈ったというのです。

彼らはいったいどんなことを祈ったのでしょうか。普通に考えれば、「自分たちを殺そうとしている者たちの手から、逃れさせてください」とでも祈りそうな場面です。しかし彼らは、この後に絶好の機会が訪れたにも拘わらず逃げ出さずしてました。そこには、揺らぐことのない神への信頼が見て取れます。

苦しみの最中に、神様を賛美するどころか、神様を呪うような言葉を口にしてしまいそうなわたしたちではないでしょうか。できることならば、パウロたちのように、苦しく、切迫した状況を経験することなど無いにこしたことはないのですが、神様を呪いたくなるような苦しい時にこそ、自分のために祈るのではなく、隣人のために祈る者へと、この小さく弱いわたしたちを造り変えてくださるように、共に祈りを合わせましょう。

(2022・10・16 説教者：稲垣真実)